

人々の暮らし①

平和な世が続いた江戸の町では、貨幣経済が発展し、お金でいろいろなものが買えるようになった。暮らしは豊かになり、江戸独特の生活を楽しんだ。

<着る、食べる、住む>

江戸時代のはじめのころ、江戸では、それまで日本の中心だった上方(関西)をお手本に暮らしていた。しかし、生活にゆとりができた町人たちは、「江戸っ子」であることに誇りを持ち、江戸独自の生活文化と流行をつくっていった。

着る～江戸の流行

生活が豊かになると、上方のまねではない流行が生まれた。江戸ならではの格好のよさは、「いき」という言葉で表される。江戸幕府によってたびたび質素節約令が出たので、目立たないところにお金をかけるようになった。



着物のもようは時代によって変化しました。

江戸初期 (元禄文化のころ)

江戸時代の着物は、袖口が小さい「小袖」が主流だった。元禄期は上方のもようの見本帳が多くでき、植物や動物など、大がらで華やかなもようが全体にえがかれていた。



はんじょうした髪結い
髪型を整える髪結いの店は、朝早くから夜まで営業していた。客は将棋やうわさ話をしながら順番を待った。江戸中期には、女性の髪結いが登場する。腕のいい女髪結いは大人気だった。

木綿の広がり

木綿は染めなどの加工が簡単で、耐久性、吸湿性、保温性に優れていた。木綿のふきゆうによってもようの流行が生まれ、町人たちは、絹よりも木綿の着物を好んだ。



子どもの着物

子どもたちの着物は、おとなの流行と同じだった。子どもは年齢によって髪型が変わった。3歳までは男女とも丸坊主。その後は男女別々の形に髪を結った。

一見地味なのが、江戸のおしゃれの基本さ。

江戸後期(化政文化)のころ

天保の改革(→p.65)前後には江戸独特の格子やしまなどの小さなもようや、表は無地で裏にもようを入れたものがおしゃれとされた。



帯やかんざしにはお金をかけてます。

地味になるけど……

見た目は……だんだん

江戸中期 (寛政の改革のころ)

幕府の質素節約令などで(→p.64)、もようが地味になった。しぶい色味で、すそにもようのあるものが人気だった。帯や小物には、お金をかけた。

食べる～

ファストフードが大人気

参勤交代(→p.19)や出かせぎなどで、女性より男性が多かった江戸では、現在のファストフードのような屋台や、振り売り(棒手振り→p.50)が数多くあった。七輪(コンロ)のふきゆうにより、温かい食べものを出すことができた。



ウナギのかば焼き
みはたでウナギをさばいてかば焼きに。客はその場で食べたり、持ち帰ったりした。



てんぷら
江戸中期以降に町人たちに広まった。屋台では、値段の安い野菜のてんぷらが多かった。

屋台の食べものの値段

食べもの	値段
そば・うどん(1ばい)	16文
にぎりずし(1かん)	4～8文
たんご(1本4つ刺し)	4文
ひやみず(砂糖・白玉入り)	4文
甘酒(1椀)	8文

*19世紀前半の値段を記しています。



中央区といえば、佃島の佃煮だよ。

にぎりずし
魚も酢飯も新鮮で、目の前で出されるので、江戸っ子に人気だった。(→p.207)



佃煮売り
佃煮でつくった佃煮(→p.217)を、通りで売った。

住む～人々が暮らした裏長屋

武士や裕福な町人以外の人々は、「裏長屋」という、今のアパートのような借家で生活した。間取りは通常、台所(土間)と4畳半の部屋1つだった。



裏長屋のもけい
長屋は表通りから路地に入り、路地をはさんだ両側にあった。

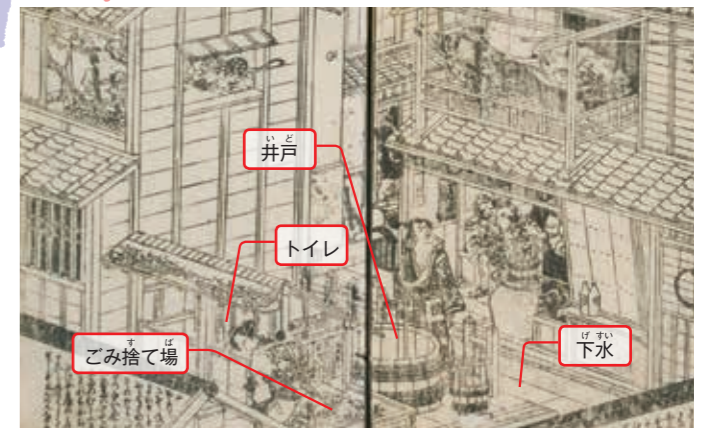
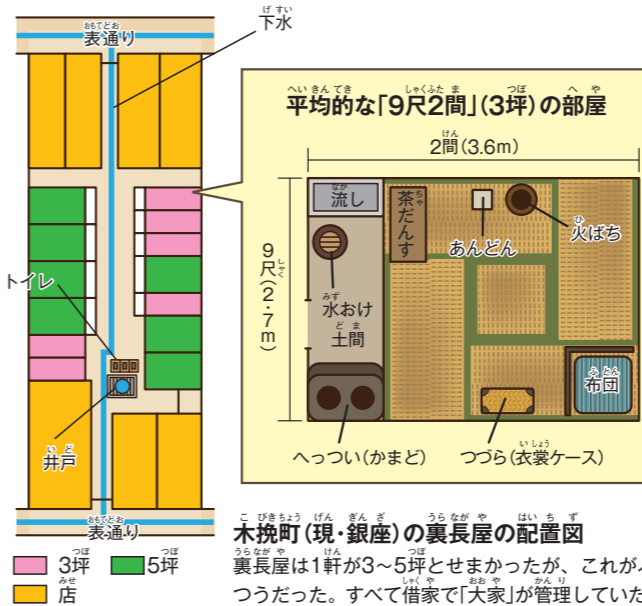
うわー、今日はなにを食べようかなあ。



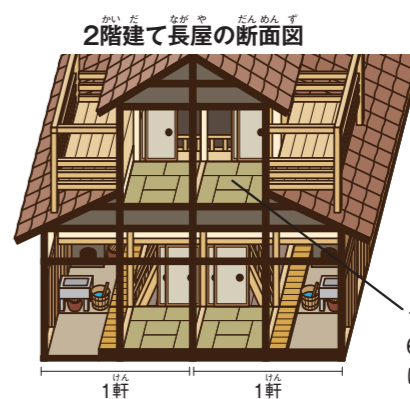
二八そば屋
「二八」の名は、そば1ばいの値段が16文だから、かけ算の「2×8が16」の語呂合わせでついたといわれるが確かではない。



せまくて不便かもしれないけど、楽しそうだね。



裏長屋での生活
水は共同の井戸(水道)を使い、ごみ捨て場もトイレも共同だった。ししょう(排せつ物)は、農家の人が買って肥料にしていた(→p.21)。



1階も2階も部屋は1つずつで6～8畳が多かった。階段が、はしごで2階に上がった。